



メルビン・ワン著

『確かな性意識を持つ子どもを育てるには』

評者・中嶋 聡(なかもクリニック院長・精神科医・首里福音教会会員)

久しぶりに、さわやかな読後感を味わいました。なぜだろう。おそらく、「当たり前のこと」が、「当たり前前の感覚」で書かれているからでしょう。

米国で開業している臨床心理学者である著者は、常識的な発達理論にもとづきながら、歪んだ性の発達を遂げる理由を、幼児期に健全な母親モデル・父親モデルに出会えなかったためだとします。そしてその結果を、ワン博士は、男は「強い男を演じる男性」か「女っぽい男性」に、また女は「弱い女を演じる女性」か「男っぽい女性」になると分類します。また、同性愛についても、歪んだ性発達の結果だとしています。

なかでも、男の子が母親から離れたあと、父親とうまく繋がることに失敗すると、父親に必要とされていないという気持ちで否定するために母親との愛着に戻ってしまうとし、これを「防衛的愛着」と呼んで、性発達の歪みの要因として注目しています。これは、わが国できわめて多く見られるパターンです。性発達

が、成長の一局面として起こるものであるという著者の考え方をよく示しています。

著者は、「最近の欧米では性意識について、あたかも『子どもの最初の感じ方や嗜好が健全であり、どちらの性別が心地よいかを子どもにも選択させるべきだ』という考えがあります。しかしそれは間違っています」と述べます。著者は、男は男として成長するのが、女は女として成長するのが健全であり、また幸せであると主張します。そして親や、保育や教育に当たる者は、早めに歪んだ兆候を発見して健全な発達の軌道に乗せるべきだし、医師や心理士はそのための援助を行うべきだと主張しています。何か、ごく当たり前のことを言われている気がしませんか？

まさにそうなのです。ところが、昨今世の中で言われているのは、これとまったく逆のことです。

いわく、「男らしさ、女らしさを強調するのは正しくない」「同性愛を特別視するのは差別であ

る」「同性間の結婚を認めないのは人権侵害である」そして「性に違和感を感じる人は、『心の性』に『からだの性』を合わせるように治療を行うべきだ」という主張。いわゆる「性同一性障害」の誕生です。

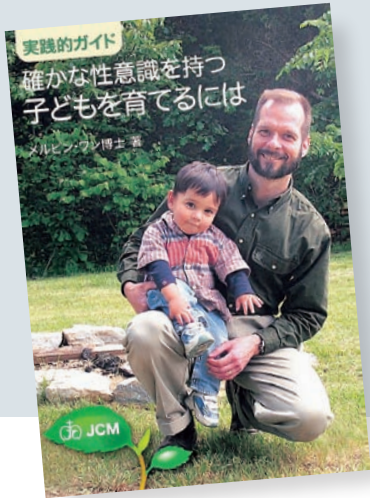
「性同一性障害」の根本的な間違いは、「心の性」に「からだの性」を合わせる」という考え方にあります。

この考え方は、つきつめれば、「私の感じ方」に「造られた私を合わせる」という考え方です。つまり、形を変えた自己中心主義なのです。

神は人間を、男と女に造られました。ここでいう男と女とは何でしょうか。造られたものとしての男と女であり、それは「からだの性」であるほかはありません。もし、それに違和感を感じるなら、自分自身を打ち叩いてからだの性に従わせるしかありません。また援助するならば、その方向に向けて、本人が自分の性を受け入れられるように援助する以外にはありません。

聖書は、いつの時代でも、われわれがどう生きるべきかについて、確かな、そして唯一の基準です。「医学的病名」や「人権」などの名のもとに、いかにも万人が否定できない進歩の成果のようにして登場する概念も、神の言葉と矛盾しているならば、それはだましごとにはなりません。現代に生きるわれわれには、真実とまがいものを見きわめる「リテラシー」が、かつて以上に求められています。

こなれた翻訳で、読みやすい小冊子です。性の問題にどのようにつけてよいか戸惑っておられる方はもちろん、子育てをなさっている、あるいは思春期の子どもへの援助にかかわっている、多くの方々に読まれることを望みます。



『確かな性意識を持つ子どもを育てるには』

著者 メルビン・ワン(藤田桂子 監訳)
JCM出版 A5判、横書き、81ページ 945円(税込み)
*本書は、FFJでも取り扱っております。

*ワン博士は、カリフォルニア州で開業している同州公認の臨床心理学者。家族は妻と娘の三人家族。中国語を話し香港とアメリカの2つの文化に通じています。